

東海 の 古 代

第220号 2018年12月

会長 : 竹内 強 副会長・発行 : 林 伸禧
編集 : 石田敬一 投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
HP : http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

「お稲荷さま」を考察する

安城市 山田 裕

はじめに

全国の神社の中で最も多いといわれているのが稲荷神社である。総本社は京都の伏見稲荷大社で、ご祭神は御魂神で、大宜津比売、保食神とも称されている。

本来は、一坐の神と思われるのだが、総本社の伏見稲荷大社では、以下の五坐の神が祀られている。

本殿

下社 宇迦之御魂神

中社 佐田彦大神

上社 大宮能売大神

摂社

田中社（田中大神）・四大神

どのような経緯で一坐から五坐に至ったかを同社に関わる文献史料から辿ってみるとともに五坐の神々についても検証を試みたい。

1. 文献史料

(1) 奈良時代以前

○『山城國風土記』逸文

「伊奈利」と称する所以は、秦中家忌寸などの遠い祖先の秦氏族“伊侶具”は稲作で裕福であった。餅を的にして、矢を射ったところ、餅が白鳥に変貌して飛び立ち、この山（稲荷山）に降りて稲が成ったことから、社名とした。」

○「稲荷神鮭神主家大西（秦）氏系図」

「秦公、賀茂建角身命二十四世賀茂県主、久治良ノ末子、和銅四年（704）二月壬午、稲荷明神鎮座ノ時禰宜トナル。天平神護元年（765）八月八日卒」

賀茂建角身命を秦公の祖先神としているが、賀茂建角身命は賀茂御祖神社（通称下鴨神社）で玉依姫と共に主祭神として祀られ、山代の賀茂氏（賀茂県主）の始祖とす

るのが通説で、秦公の祖先神であるとは考えられない。

『新撰姓氏録』によれば賀茂建角身命は^{かものみこと}神魂命の孫で、神武東征の際、高木神・天照大神の命を承けて日向の霧の峰に天降り、大和の葛城山に到り、八咫鳥に化身して神武天皇を先導し、金鵄として勝利に貢献したとある。茲で、重要な点は、**賀茂建角身命＝八咫鳥**と云う伝承が存在した点にある。

『出雲国風土記』が記す神魂命は、『古事記』が記す^{かみむびのかみ}神産日神、『日本書紀』では神皇産霊神と同一神であるとの通説が敷衍しており、**神魂命＝神産日神**となる。

また、上記二史料からは、秦氏と「稻荷神」との因果関係はうかがえず、秦氏が天平神護元年から稻荷社の社家として禰宜職に就いた点を確認するのみである。

(2) 平安時代

○『延喜式』神名帳頭註

延喜五年（924年）にまとめられた『延喜式』神名帳頭註に、「稻荷」山城國紀伊郡とある。

**本社 倉稻魂神也 此神素戔嗚の女也、
母大山祇神女大市姫也**

ご祭神は父素戔嗚・母大市姫との御子倉稻魂神一座と認識されていたようである。

倉稻魂の読みについて、『日本書紀』神代上 第五段一書第七に「倉稻魂、此れを^{うかのみたま}宇介能美佐磨と云う」と記されている。

博多の「櫛田神社」の元宮とされる佐賀県神埼市神埼の「櫛田宮」の摂社櫛森稻荷神社のご祭神は以下の通りである。

倉稻魂命・大宮女命・猿田彦命

社伝によれば、「景行天皇が当地に巡幸した折に、不幸が続き住民が苦しんでいると聞き、当社を建て、神を祀り鎮めたのが発祥」としているので、古代から倉稻魂命は「稻荷さま」として崇められたようである。倉稻魂命・大宮売命・猿田彦命との関係は不明だが、おそらく血縁関係にあったと推測される。

○『延喜式』^{おおとのほかひ}大殿祭祀詞（忌部氏）

同祭は「**屋船久久遲命木の霊・屋船豊宇気姫命稻の霊俗に宇賀能美多麻・大宮賣命**」の三神を祀って皇御孫命の住居である宮殿の平安を願い大御身の平安と御代の繁栄を希求する祭りである。

後代の注記では、「**これ船の^{みたま}霊となり、世に宇迦之という。**」とあり、**屋船豊宇気姫命＝宇迦之御魂神とする**認識があったようである。

「屋船」とは屋根が葺かれた船という意で、屋船久久遲命と共に船で移動してきたと考えられる。

豊宇気姫について、『日本書紀』（以下、『紀』と略す）の「神々の生成」では、イザナミが体調を崩して尿から生まれたのが^{みすほのめ}弥都波能売の神で、この神の子を豊宇気毗売の神と記しており、**大山祇神の娘大市姫は、またの名が弥都波能売の神と呼ばれていたことになる。**（『紀』では**罔象女**とも表記）

屋船豊宇気姫命が尿から派生した御子神と『古事記』（以下、『記』と略す）及び『紀』は記しているが、格式の高い伊勢神宮下宮・広瀬大社のご祭神として祀られ、また、**伊勢神道の渡会氏は下宮の「豊受大神」を内宮の「天照大神」よりも上位に置いていた**事実から照らし合わせると、トヨウケ姫に関する『記』の記述は重要なレトリックが隠されていると言わざるを得ない。また神道界の勢力地図の変遷が、本来の神々を移坐したとも考えられる。

忌部神道は奈良時代以降、藤原氏による中臣神道によってその勢力を失い、伊勢神道の渡会氏は朝廷が南北朝に分立した際に南朝側についたことによりつまずき、室町時代になると吉田兼俱が興した「天照大神」を最高神とする吉田神道が朝廷と幕府に受容され、次第に伊勢神道は吉田神道に圧迫され、その勢力が衰微した経緯がある。

屋船久久遲命について、『記』の「神々の生成」では、イザナギとイザナミとの間に生まれた**木の神「久久能智の神」**と記され、『紀』神代上 第五段一書第六では、木神等を「句句廻馳」と記しているが、トヨウケ姫と関連する記述はない。

久久能遲命を祀る西宮市山口町の公智神社では、

主祭神：健速須佐之男神 配祀神：久久能智神と奇稲田姫命

が祀られている。クシイナダ姫はスサノオの妃であることから、久久能智神はスサノオと推測される。

したがって、

屋船久久能智命＝スサノオ

屋船豊宇気命＝大市姫またの名をミズハノメ

である蓋然性が高い。

大宮売神については後述する。

- 『伊呂波字類抄』平安時代末期に橘忠謙が著した国語辞典。

下宮 田中 中宮 命婦 上宮 小薄

田中・命婦神については後述する。

小薄神の「小薄」は「キツネ」の意と解釈されているが、本当のところは不明である。

(3) 鎌倉時代

- 『古事類縁』神祇部六十八

稻荷神社 山城國紀伊郡深草村稻荷山ノ麓ニアリテ倉稻魂命・素戔鳴尊・大市姫命ヲ祀ル

- 『神祇拾遺』稻荷社本縁

本殿 宇迦御魂神父大地主素戔鳴、母大山祇女大市姫 又豊宇気 傳有之

第二殿 素戔鳴命

第三殿 大市姫 己上秘秘中甚深事也

中社 大巳貴命

四大臣 五十猛命・大屋姫・抓津姫・事八十神

同書「鈴鹿本」は、

本殿 宇迦御魂神父大地主素戔鳴、母大山祇女大市姫 又豊宇気 傳有之

第二殿 素戔鳴命

第三殿 大市姫亦大宮命婦トモ云ウ

田中社 大巳貴命

四大神 五十猛命・大屋姫・抓津姫・客人大歳神

同書には、弘長三年（1263）田中社・四大神の二坐を加え、五坐とされたとあるが、いかなる経緯で祀られたかは不明である。

同書で特に興味深いのが、「大市姫を秘中の秘」としている点にある。伏見稻荷大社の伝承では、「**本来の稻荷神＝大市姫**」であったことがうかがえる。

命婦とは、天平宝宇元年（747）に施行された「養老律令－職員令」の中務省条に、

五位以上の女性を内命婦、五位以上の官人の妻のことを外命婦^{げの}という^{とある}。但し、命婦は官職ではなく所属官司の職掌に奉仕する地位であった。命婦の奉仕する対象は内侍司の務めで、天皇の儀式或いは神事に限定された。

ところが、古代において命婦は側室の意であった。

スサノオの正妻を櫛稲田姫とすると、神大市姫は二番目の妻である可能性がうかがえ、側室の意である「命婦」と呼ばれたとも考えられる。

「田中神」については後述する。

「四大神」のうち、五十猛命・大屋姫（またの名大屋津姫）・抓津姫は『紀』神代上第八段一書第四にいずれもスサノオの御子とし、五十猛命を樹種の神、紀伊国に坐す大神。大屋姫（またの名大屋津姫）・抓津姫は樹種を全国に分布した女神と記している。

『記』には三神の記述はない。

客人神^{まろうと}の大年神について、『記』はスサノオと神大市姫との御子神と記しているが、『紀』には記述がない。

『先代旧事本紀』地祇本紀では、大年神を五十猛命の弟と記しているが、同書の研究者である原田常治・大野七三の両氏は、大年神と饒速日命とは同体の神であると指摘している。

○『諸社根元記』稻荷

下社 大宮命婦 田中社

中社 大宮 四大神

上社 客神十禪師

○『神道五部書』

伊勢神宮で編纂された書。同書には、内宮と下宮の主な社殿と祭神が記されている。同書の一つである「伊勢二所皇大神御鎮座伝記^{とうめ みけつかみ}」では内宮について「御倉神の三坐は、素戔嗚の娘宇迦之御魂神なり。また、専女とも三狐神とも名づく。」と記される。

専女は、平安時代の紀貫之による紀行文『土佐日記』では、老女として記されている。三狐神の「狐」に着目すると、「伊呂波字類抄」で稻荷社下宮のご祭神「小薄神（狐の意）」が、ウカノミタマ神である可能性がうかがえる。

下宮についても、「調御倉神は、宇迦之御魂神におわす。これ、伊弉諾・伊弉冉二柱の尊の生みし所の神なり。また、大宜都姫とも号す。また、保食神とも名づく。神祇官社内におわす御膳神とはこれなり。また、神服機殿に祝い祀る三狐神とは同坐の神なり。故にまた専女神とも名づく。斎王専女とはこの縁なり。また、稻の霊も宇迦之御魂神におわして、西北方に敬いて祭り拜するなり。」と記されている。

以上から、ウカノミタマ神＝大宜都姫＝保食神＝御膳神＝専女神と推論できる。

(4) 室町時代

○「吉田家神道書」

神祇次官吉田兼俱が著した「神名帳頭註」伏見稻荷条では、「本社。宇迦之御魂神也。この神は素戔嗚の娘なり。母は大市比売なり。宇迦之御魂神は百穀を播きし神なり。故に稻荷と名づくか。伊弉諾の御娘にこの名これあり。」と記している。

イザナギの御娘について、『記』は、「石巢比売の神・水の神速秋津比売の神・鹿屋野比売、亦の名を野椎・大宜都比売の神」の四神と記している。

他方、『紀』は、「大日靈貴^{おほひるめのみこと}・土神埴山姫・水神罔象女・水戸神等速秋津日命」の四神と記しているが、倉稻魂命は、軻遇突智神から派生したものであり、イザナギの子

ではない。

したがって、吉田兼俱がウカノミタマ神をイザナギの御娘とする根拠は奈辺にあるのか不明である。

○『二十二社註式』伏見稻荷条 神祇次官吉田兼右かねみぎが著した書。

下社 大宮女命 伊弉冉みすはのめの娘罔象女命

中社 稻倉魂命神 一名豊宇気姫命、広瀬大明神・伊勢下宮

上社 猿田彦命

吉田兼右は大宮女命＝罔象女命とし、同様に稻倉魂命神（倉稻魂命の誤記かもしれない）＝豊宇気姫命としている。

大宮女は大宮売・大宮能賣神・大宮比売命等と表記され、大同二年（807）に成立した齋部広成による『古語拾遺』では、天太玉命の御子神としている。

「玄松子」のブログでは、大宮売命を天細女命とし、同体の神と紹介している。

天太玉命について、『記』は「布刀玉命」、『紀』は「太玉命」と記されるが、出自は不明である。両書では、「アマテラスの岩戸隠れ」と「ニニギノミコトの天孫降臨」に登場するが、大宮女命との関係については記されていない。

2. 「百嶋神社考古学」

文献史料を検証すると、「倉稻魂神ウカノミタマノカミ・大市姫・大宮売」の解釈が錯綜を極めていいる。また、田中神・四大神についての解釈も曖昧模糊となっている。

「稻荷さま」の解釈を巡っては、「神社考古学」に60年を捧げた故百嶋由一郎氏が作成された「神々の系図－平成12年考」と同氏の講演で採録されたDVDに重要な示唆が含まれていると考えられるため検証を試みたい。

(1) 大市姫

大山祇神（またの名、月読命）と草野姫かやのひめとの間の御子神で、またの名を水神罔象女・龍神姫・伊和野姫としている。

スサノオの後で、御子神に辛国息長大姫（またの名を志那津姫・大目姫・天細女命等）がある。

大市姫のまたの名、罔象女神は全国各地の神社で祀られている。

『記紀』は、罔象女をイザナミが体調を崩した際に尿から生まれた神として描かれているのとは対照的である。

多くの名を持つ理由は、当時の女神は血筋・格式が尊く、結婚や移動の都度名を改められたと百嶋氏は指摘されている。

スサノオとの間に生まれた御子神は辛国息長大姫（志那津姫）こと天細女としている。

(2) 倉稻魂神

故百嶋氏は「倉稻魂神は大市姫」であり、またの名を罔象女・龍神姫と呼ばれていたとしている。

スサノオとの間に誕生したのが、辛国息長大姫、またの名を支那津姫・大目姫・天細女・女鍛冶神・豊受姫と呼ばれたとしている。

女鍛冶神と呼ばれた所以は確かではないが、稲作増産に寄与した農業鉄器生産の熟練者であったと推測される。

女鍛冶神の母、大市姫もそのような側面を有していた可能性がある。

大市姫の活躍時期は、弥生時代末期、およそ2世紀以降に急速に発展した稲作文化

時期に符合する。民は稲作増産による備蓄米・余剰米を貯蔵するための「倉」を建設した。「倉」から搬出された余剰米は、市で「物々交換」で売買され、この市が「交易の中心地」として発展し、「大きな市」を形成していったと考えられる。

すなわち、市場経済の萌芽である。

大市姫の「大市」は「大きな市」を意味し、現代的に言えば「市場経済」を齎した。

その証左が全国に残されている「大市」の地名に残っている

大市姫は、稲作文化発展の功労者として、後に民から「倉稻魂神」として崇められたと推測される。

(3) 大年神（大歳神とも表記される）

『記』では、ウカノミタマ神の弟神として、皇統や支配神でもない神だが、神裔が記される珍しい神である。この点について故百嶋氏は、阿蘇の統領多^{おほ}氏の庶流であった阿蘇氏の末裔につながる藤原氏によって『紀』に挿入されたと述べられている。

同神を祀る神社は「平成祭データ」で検索すると全国に734社あり、最周密地域は兵庫県で448社ある。同神社の由来については神亀年間（724～729年）に伊勢の伊雑宮から勧請されたとする神社が多い。

故百嶋氏は、大年神はまたの名を海幸彦・天児屋根命・天忍穂耳命・志那津彦・饒速日命・五十猛神など多くの名で呼ばれていたとしている。

大年神の後、志那津姫はまたの名を出勢稻荷・女鍛冶神・豊受大神・猿女・天細女命などと呼ばれていた。

大年神の御子神に御年神があり、またの名を^{はいきのかみ}拝跪神、『記紀』編纂者によって天皇名を贈られた孝安天皇としている。

大年神こと海幸彦は『記紀』の「海幸彦・山幸彦神話」では、後に山幸彦の従僕となるなど散々の態であるが、多くの神名を持つ偉大な神として日本各地の神社で篤く崇拝されている。

一例を挙げれば、またの名である天児屋根命は、全国の春日社で祀られているが、妻の天細女命は名を秘されて「比賣神」とされている。同様な例が下総国一宮の香取神宮でも、海幸彦のまたの名「経津主命」とともに「比賣神」が祀られている。

なお、吉田神道の吉田家は「天児屋根命」を祖神としている。

また、中臣神道の中臣氏は海幸彦のまたの名「武甕槌命」を祖神としている

海幸彦を貶める『記紀』の編集姿勢は、奈辺にあったのか疑問である。

(4) 屋船久久遲命と屋船豊宇気姫

故百嶋氏は豊宇気姫を大市姫またの名罔象女命と指摘され、また伊勢神宮下宮が祀る豊受大神は、スサノオと大市姫の御子神アメノウズメと指摘されている。

すなわち、屋船豊宇気姫＝大市姫、豊受大神＝アメノウズメ

三重県伊勢市宇治の猿田彦神社の主祭神は猿田彦大神と天宇受賣命である。

同社境内には、天宇受賣命を祀る佐留女（＝猿女）神社が本殿に向かい合うように建っている。

この配置から、猿田彦と佐留女ことアメノウズメは夫婦神として祀られていることは確実である。

屋船久久遲命は大市姫の夫であったスサノオと指摘されている。文献史料からも同氏の指摘には頷けるものがある。

(5) 大宮女命（大宮売命とも表記される）

故百嶋氏は**大宮女命**を**豊玉姫**とし、またの名に美保津姫・若狭姫・田心姫と指摘され、さらに最初の夫が山幸彦ことヒコホホデミノミコトで、二人の間にはウガヤフキアエズ（またの名を天稚彦・アジスキタカヒコネ・迦毛大神）が生まれた。山幸彦と別れた後は、事代主（少年期の名はスクナヒコ）を連れ子に、出雲へ移動した大己貴命こと大国主に嫁ぎ、名を美保津姫に改められ、その後は大己貴命と共に各地へ移動し、若狭姫・田心姫・大宮売などの名に改められたと指摘している。

これらの指摘について、各地の神社から検証してみたい。

トヨタマヒメを祀る神社には、以下のパターンがある。

① 豊玉姫

山幸彦ことヒコホホデミノミコトと一緒に祀られている。

益救神社（屋久島）・海神神社（対馬市）・鹿児島神宮（南九州市）・豊玉姫神社（南九州市）など。

海神神社では、御子神ウガヤフキアエズが共に祀られている。

② 美保津姫

大己貴神こと大国主神と一緒に祀られている。

美保神社（松江市）・氷川女體神社（さいたま市）など。

美保神社では御子神事代主が共に祀られている。

③ 田心姫

大己貴神こと大国主神と一緒に祀られている。

日光二荒神社（日光市）・一宮神社（神戸市）・巖島神社など。

日光二荒神社では御子神アジスキタカヒコネ（＝ウガヤフキアエズ）と共に祀られている。

④ 大宮売

主祭神祭大己貴神こと大国主の配祀神として祀られている。

常陸國総社（茨城県石岡市）・大目神社（佐渡市）など。

以上の検証から、故百嶋氏の指摘には頷けるものがある。

(6) 田中神

故百嶋氏は「開化天皇」と指摘している。理由として「祇園祭」を初めて行われた方だとされているが、確証は不明である。

(7) 四大神

故百嶋氏は「**四大神は猿田彦**」とし、四大神の四とは「**四公六民の四**」である。従来の収税方針「五公五民」から「四公六民」へ改めたのが猿田彦としている。

新たな収税方針による税負担の軽減がもたらす効用は絶大であった。民は一層稲作の増産に尽力し、民の生活は一段と豊かになり、人口も増加した。民はこれを讃えて猿田彦を「四大神」として崇めたようである。

(8) 小薄神

同神は「老狐＝老女」と考えられ、大宮売より年長の女神、「大市姫」である蓋然性が高い。

(9) 佐田彦大神

故百嶋氏は「佐田大神」と「佐田彦大神」とは全く別の神と指摘され、「佐田大神」

は大年神こと海幸彦と瀛津島姫こと市杵島姫との御子神大山咋としている。市杵島姫は、スサノオと磐長姫またの名アカル姫の間に生まれた御子神としている。

Wikipediaによれば、出雲の佐田神社の主祭神について「**明治維新時に神祇官の命を承けた松江藩神詞懸により、祭り神を猿田彦命と明示するように指示されたが、神社側は一旦拒否したが、後に従った。**」と伝えられている。したがって、本来の主祭神は「佐田大神」と考えられる。

故百嶋氏は、この「佐田大神」について、「蘇民将来」伝説の主人公の一人である「武塔神」ことスサノオは自らが起こした暴動を反省し、謝罪するために、天照大神に金山彦が打った「天叢雲剣」を献上した。献上の使者に立ったのがスサノオの孫、少年期の名が阿蘇国造職に任じられていた**速瓶玉命**、この功績によって「佐田大神」と命名された。（福岡県・熊本県では**大山咋神**と呼ばれた）その後、大己貴命と共に出雲国へ移動後は出雲国の佐田神社の主祭神「佐田大神」として崇められた。山代国へ移動後は日吉大社・松尾大社の主祭神「大山咋神」として崇められた。

注：速瓶玉命

『先代旧事本紀』では、父健盤龍命、母阿蘇津姫との御子で阿蘇神社を創建したといわれているが、故百嶋氏の「神々の系図－平成12年考」では、父海幸彦こと大年神、母市杵島姫の御子としている。

3. まとめ

現在、伏見稲荷大社で祀られている五坐の神々は、つぎのとおりである。

本殿 下社 宇迦之御魂神＝大市姫
中社 佐田彦大神ではなく佐田大神＝大山咋
上社 大宮能売大神＝豊玉姫
摂社 田中大神＝開化天皇（神功皇后の夫）
四大神＝猿田彦

伏見稲荷大社のご祭神の変遷史をながめると、そこには時代を反映した各神道家とのかかわりが垣間見える。

神魂命＝カミムスビ神＝熊野速玉命について、故百嶋氏は博多櫛田神社の主祭神“大幡主”と指摘されている。

おわりに

私の住む安城市に「三河三白山」と呼ばれる「大岡白山神社・上条白山媛神社・桜井神社」の三社がある。いずれも案内板には「イザナギ・イザナミ」をご祭神としている。本来は神社名が示す通り、「**白山姫**」がご祭神であった。

この三社のうち、大岡白山神社のご祭神は「白山媛」であり、もとは「**大市社**」と呼ばれる大市郷の鎮守神であったと言い伝えられている。

「大市」という地名は、大山祇の娘「大市姫」に因むとする説が有力である。したがって、「大市姫」のご神格はその名が示すとおり、「大きな市」であったと考えられる。

「市」は古代における交易の中核を成すものであり、人々の往来は殷賑をきわめていたであろう。その証左として、「稲荷さま」は、現代でも「商売繁盛の神」として崇められている。その原点が、「**稲荷さまこと大市姫**」であった。

<参考文献>

『古事類苑－神祇部』、『日本書紀上』（岩波書店）、『古事記』（角川書店）、国会図書館デジタルコレクション

1 巡幸各地の概況

巡幸には複数の説が存在するが、ここでは『日本書紀』による順路を辿ってみたい。

< 景行天皇九州巡幸 >



(1) 周芳国の沙塵^{さば} (山口県防府市)

景行12年9月、この地から巡幸の物語は始まる。

沙塵は佐波川流域の地で当時は海岸線が大きく後退し集落は海岸近くにあった。

南には向島があり、船舳先に三種神器をつけて服従を誓った女性首長の神夏磯媛がいた。ただし、この逸話は仲哀天皇条にも記載されており、そこからの引用であろう。

このとき退治したのは鼻垂など宇佐付近の野盗であるが、この地は遠賀川から香春岳にかけての物部氏の本貫地であり、物部氏が宇佐に進出した場合の逸話である可能性が高い。また、一行は賊の討伐の後、長峽に行宮を建てているが、行程から見て、まず行宮を造りその地を足掛かりに討伐を行ったと思われる。

(2) 碩田国^{おおきた}の来田見邑 (大分県竹田市九重)

一行が早見村 (別府市) に移ったところ、地元の早津媛から山奥に賊がいることを聞き、九重連峰南の来田見邑 (竹田市) に行宮を建てて前線基地とした。この地は阿蘇氏の本貫地付近である。

ここでは打猿など5人の土蜘蛛を討ち取とるため、柏峽の大野の地で志我神、直入物部神、直入中臣神に祈った。進軍している一族と安曇氏、物部氏、中臣氏との関連が覗かれる。なお、中臣は天照大神時代の天兒屋根命を祖としており、九州にも勢力があったと考えられる。

(3) 日向国の高屋宮（宮崎県西都市または宮崎市）

ここでは行宮を建てて、これからの熊襲征伐の作戦を練ったとされている。

熊襲には厚鹿文と辻鹿文を頂点に八十梟師と言われる程の部下がおり尋常では討伐が難しいと思われた。そこで彼等の娘を騙して討伐することに成功した。若干、話が出来すぎているが物語として捉えたい。

(4) 日向国の丹裳小野（宮崎県西都市）

景行17年3月、熊襲討伐を完了して丹裳小野に遊んだ。熊襲討伐には5年の歳月が必要であった。ここでは東方を望んで大和を忍ぶ歌を詠んでいる。

児湯郡は高屋宮の北方に位置し特段の遺跡も無い。なぜここに行ったのかは不明である。

(5) 日向国の夷守（宮崎県小林市）

霧島神社付近であるが、記事に諸県君泉媛が登場する。諸県郡は広大な地域を指すので、夷守は西端に位置すると思われる。諸県君は5世紀の仁徳天皇との関係が有名であるが、既にこの時代に九州王朝とは親交があったことになる。この地では夷守兄弟は既に服従しており、争いは起きなかった。

(6) 熊県（熊本県球磨郡または人吉市）

熊津彦兄弟を召したが弟熊が応じなかったため成敗した。

日向国の高屋宮を根拠地にして熊襲討伐が一旦完了したと思われたが。未だ服従しない者がいた。

(7) 火国の葦北（熊本県葦北郡）

葦北の小島で食事をした記述がある。小島は島のように思えるが該当する島は無いので地名であると思われる。天皇はこの地で半月程滞在した。

(8) 八代県の豊村（熊本県八代市）

葦北から船で八代県に着いた。『日本書紀』では到着するときには日が暮れてしまったとしているが、葦北から八代市までは25km程度あり、なぜそれ程時間が掛かったか疑問であるが、ここは説話であると考えたい。

(9) 玉杵名邑（玉名市）

八代で1ヶ月程滞在した後、一旦、高来（島原市）に渡り津頼を成敗した後、対岸の玉杵名邑に着いた。

(10) 阿蘇国（阿蘇郡）

阿蘇津彦、阿蘇津媛の2神が現れた。これが阿蘇神社の始まりとする。

しかし、阿蘇君の歴史はもっと古く、ここは説話の1つと捉えるしか無い。

(11) 筑紫国の的邑（福岡県浮羽郡）

阿蘇からは三毛（福岡県三池）、八女（福岡県八女市）を経由しての的邑に着き、日向から大和へ帰途に就いたとされている。この時に八女で天皇を接待したのは水沼県主猿大海で、水沼県主が祀っていた「八女津媛」の名も登場する。

九州西側は邪馬壱国の記述にも登場する箇所でもあり、すでに治安が保たれていた。

2 日本武尊の九州征伐

『日本書紀』には景行27年に討伐した熊襲が再度反逆を起したので、日本武尊が九州まで討伐に出掛ける記事がある。この記事も前述の「景行天皇の巡幸」と同じくヤマト朝廷が拘わったとは思えず、九州王朝内部の出来事であると考えられる。

反乱を起したのは川上梟師^{かわかみのたける}であったが、場所は隼人の根拠地の「熊襲の穴」（霧島市）とされており、今回の討伐との関係は不明である。

3 日向国の高屋宮と西都原遺跡群

西都原遺跡群は5世紀に栄えた古墳群であるが、4世紀前半には宮崎市内を流れる大淀川流域の生目古墳群が最初の古墳群として存在した。一方、高屋宮の所在地は西都市と宮崎市が候補に挙げられており、西都市側には行宮址の碑が存在する。宮崎市側はシーガイアの近くの高屋神社付近とされているが、この地は生目古墳群のすぐ近くにある。

生目古墳群は100mを越す古墳が3基あり、4世紀において最も栄えていた地域であった。大淀川の上流には熊襲の地のえびの盆地があり、山を越えると球磨盆地が存在する。討伐隊は高屋宮を拠点に食料や武器の補充を行い、出撃を繰り返していたと考えられる。

4 九州北部の政治体制

『豊前市史』（平成3年）に拠れば、北九州は筑紫君を始め宗像君、菟狭君、豊直、国前臣、鞍橋君、碩田君、海部君など8人の国造の下に県主が付く体制があったされているが、この記事は6世紀頃のものであり、4世紀には『先代旧事本紀』に表されている5～6名程度の国造の祖先の氏族が居たと思われる。九州中南部の肥君や阿蘇君、諸県君などの祖先との関係は不明であるが、おそらく筑紫君を中心とした合議制の政治体制が築かれていたと考えられる。当時、水沼氏は県主であり地方の豪族の地位にあった。

合議を行っていた場所として「女山神籠石」近くの「みやま市瀬高町山門」や「久留米市三潴町高三潴」が挙げられているが、いずれも水害の多発するデルタ地帯にあり、また付近の遺跡からは甕棺などは出土するが、大王を想定できる出土品が無い。今後の発掘調査に期待したい。

< 北九州の豪族 > (出典：豊前市史)



5 まとめ

以上、『日本書紀』の記述に従い概要を整理してみた。

最近の学説では、「朝鮮半島では近隣諸国間の争いが絶えない中、九州地方では大規模な争いは無かった。」とする説が有力であるが、今回の出来事から4世紀前半で既に集団統治体制が出来あがっており、これが治安の維持を果たしていたと考えられる。何処までを史実とみるかによって結論が大きく変わる可能性はあるが、次の事が言える。

(1) 実行部隊は九州北部に根拠を持つ安曇氏、物部氏、中臣氏であった。

このことは碩田国の来田見邑で土蜘蛛を討ち取るときに祈った神の名前から覗かれる。問題は彼らを派遣した勢力であるが、九州王朝の合議によるものと考えるのが最も素直であろう。渡来人の大量流入により仕事にあぶれた者が大量に発生し、各豪族はその対応に頭を悩ませ、一挙に駆逐することを計画したと思われる。

(2) 野盗の討伐の方法は比較的平和的であった。

基本的に逆らう首長だけを成敗した。物語には多数の女性の首長や首長の娘が登場するが、一部を除き成敗はせず、彼女等に自分の子供を生ませることにより服従を誓わせた。この方法は部下が徹底的に抵抗せず味方の消耗も少なく済む。しかし、日本武尊の条にある様に一度逆らえば容赦なく成敗した。

(3) 日向国の高屋宮は宮崎市にあった。

通説では西都市の方が有力であるが、物資の補給基地として捕らえると宮崎市の方が妥当である。「生目古墳群発掘調査報告書」（宮崎市教育委員会、2016年）に拠れば、21号墳の周囲には13基の横穴式墓が存在し、棺の中から銚などの武器が出土した。この墳は時代が少し下がるが、武力集団の存在が覗かれる。

(4) 九州王朝の勢力範囲の空白地は南九州のみとなった。

今回の討伐の大半を球磨地方の熊襲制圧に費やした。しかし、南部にはまだ隼人族が存在する。南九州の古墳群は5世紀に一ツ瀬川流域の西都原（西都市）に移り、男・女狭穂古墳が造られた後、大隈半島の志布志湾流域に移る。この時点で隼人の活動範囲は大幅に狭められるが、隼人が全面的に九州王朝やヤマト王朝に帰属するのは、国府が造られる7世紀後半まで待たねばならなかった。

(5) 九州出身の媛の存在は謎

『日本書紀』では「日向髪長大田根媛」、「御刀媛」、「襲武媛」が登場する。

景行天皇の九州巡幸が無かった場合、これらの媛をどの様に考えればよいかは課題になる。媛の子はいずれも九州地方も国造になっていることから、諸県君と大和朝廷との関係が親密になった折に粉飾された可能性は高い。

『隋書』の月行とは

一宮市 竹嶋正雄

1. はじめに

『隋書』には、距離を表示する方法として「日行」と「月行」がある。「日行」は誰もが徒歩で一日に進む距離と理解している。そして、「月行」とは一月、即ち30日で進む距離として理解されている。しかし、『隋書』百濟伝及び倭国伝を読み解くと、それとは違うようである。それを明らかにする。

2. 「日行」について

『隋書』百濟伝の最後に「**百濟自西行三日、至貊國千餘里**伝」とある。つまり、百濟は西方より行くこと三日、(その出発地である)貊国に至るには千餘里とある。即ち、百濟の都から貊国の国境まで千餘里であると伝えている。

百濟の都とは「**帶方(郡)の故地にその国を立て、始めた**」とあるので帶方郡役所のあった現ソウル市であり、そこから国境までが千餘里=約80kmであると言っている。この事は地図上で一致するのである。即ち、この80km強を移動するのに三日を要したと言っている。つまり、一日行は約30km/日であり、徒歩にての移動としては妥当な距離である。そして、ここの「一日」とは日の出から日没までの太陽が出ている間のことを指していると考ええる。

3. 「月行」について

(1) 聃牟羅國

『隋書』百濟伝の最後の条に「**其南、海行三月有聃牟羅國、南北千餘里、東西數百里、土多獐鹿、附庸於百濟**」とある。ここにある聃牟羅國とは国状の説明から現濟州島であることは間違いないのであるが、同じ『隋書』倭国伝に「**度百濟、行、至竹島、南望聃羅國、經都斯麻國、迴在大海中**」とあり、濟州島を聃羅國としているので、聃牟羅國は聃羅國とは別のものであり濟州島ではないとする説がある。

つまり、其南へ海を行くとあるので聃牟羅國を南方の島に求める考えがある。

(2) 海行三月

前項にある「**海行三月**」の三月とは三ヶ月=90日のことであり、南へ海に行くこと90日のところに聃牟羅國があるとする考えである。では、90日で到達する場所とは何処かであるが、この百濟伝は隋が陳を滅ぼした589年頃の事を伝えているのであるから、当時の航海術からすれば航行速度は3ノット(1ノット=1.85km/時)であるので、一日の航行距離は約56km [(1.85×3)km/時×10時間] であり、90日間で約5000kmとなる。

つまり、ボルネオ島に到達する事で、このボルネオ島を聃牟羅國とする考えである。

4. 真の「月行」の考察

しかし、5000kmも離れた、遙か彼方のボルネオ島が百濟国に属しているとする事は無理である。やはり、聃牟羅國は濟州島である。この事実から「真の月行」を考察する。

百濟の都港から濟州島までの距離が「**海行三月**」であり、それが約400kmに当たるのである。当時の海行速度を3ノットとすると1ノット=1.85km/時であるので時速約5.5kmとなる。

そして、約400kmを三月で行くのであるから、一月で約130km進む事になる。この130kmを時速5.5kmで割ると約24時間となる。

つまり、一月とは24時間を意味するのである。日のある内の進行である「日行」に対し、月の出ている夜も海行する事を「月行」と表現したと考える。即ち、「月行」とは24時間連続(昼夜)海行した時の距離を表している。

私の卑彌呼

名古屋市 石田泉城

其國本亦以男子為王，住七八十年，倭國亂，相攻伐歷年，乃共立一女子為王，名曰卑彌呼，事鬼道，能惑眾，年已長大，無夫婿，有男弟佐治國。

(中華所局版『三國志』856頁)

其の国、本は亦、男子を以って王と為す。住まるところ七、八十年。倭国は乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち一女子を共立して王と為す。名は卑弥呼と曰う。鬼道に事え能く衆を惑わす。年すでに長大。夫婿なく、男弟ありて国を治むを佐ける。

(読み下しは泉城による)

鬼道に事え能く衆を惑わし、年齢は已に長大なれども夫婿はなく、男弟が有りて国を佐け治め、王となって以来、姿を見る者は少ないとあります。

この記事から、屋内にこもって呪術をあやつる老婆を連想する人が多いと思います。

老婆のイメージは、この「年已長大」(年齢はすでに長大)の表現に大きく影響されていますが、これに対して古田武彦氏は、『ここに古代王朝ありき』(朝日新聞社、昭和54年)において『三国志』の「呉志七」の例(4頁)を挙げ、曹丕は34歳で即位していますので「年已長大」は30代半ばを指しているとされます。

その記事は次のとおりです。

又長文之徒、昔所以能守善者、以操笮其頭、畏操威嚴、故竭心盡意、不敢為非耳。逮丕繼業、年已長大、承操之後、以恩情加之、用能感義。今叡幼弱、隨人東西、

(中華書局版「呉志七」1234頁)

この記事は、陳長文らがこれまで善者を守ってふるまってきたのは、曹操の威厳をおそれて悪事をはたらかなかったにすぎないとした上で、曹丕が曹操のあとを継いだときには、すでに立派な大人になっていたのが曹操のやり方で陳長文らをうまくコントロールできたが、その子の曹叡は年が幼く一人前ではないため人のいうがままになっているという意味です。

この記事における「年已長大」は下線のとおり「幼弱」と対比して使用されており、曹叡が20代の若輩者であるのに対して曹丕は34歳の大人になっている意味として「年已長大」の表現が使われています。

したがって、「年已長大」は、老人の意味ではなく、また34歳という固定的な年齢を指すのでもなく、比較対照するものに比べて年齢が高いときに使用される語句です。これが「年已長大」を理解する重要なポイントです。

さて『三国史記』の「新羅本記」(1145年成立)には「倭女王卑彌乎遣使來聘」とあり、173年に卑弥呼が新羅へ使者を送ったとする記事があります。

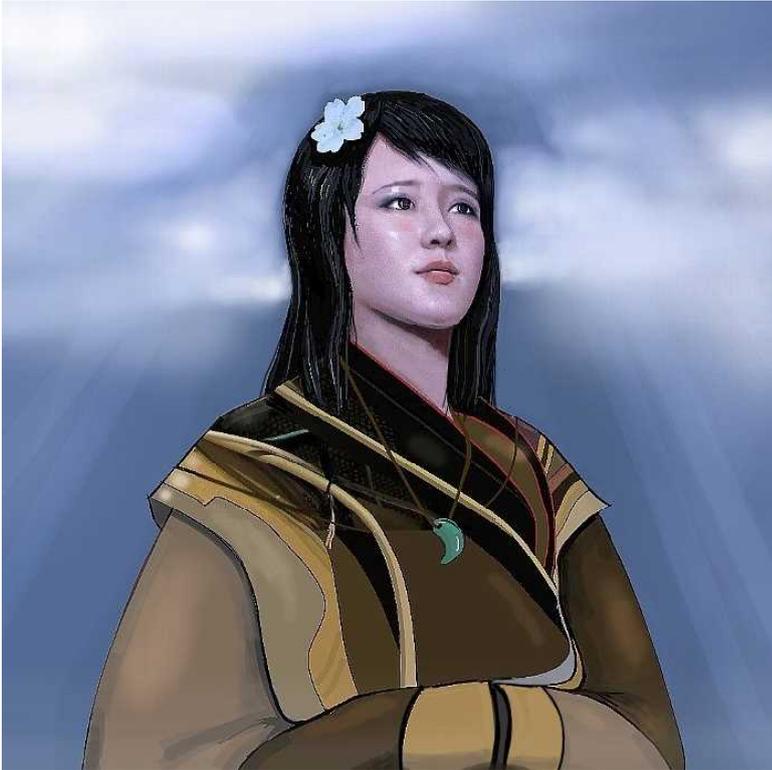
238年(景初二年)には、倭の女王は帯方郡に使者を送り、248年(正始九年)には卑弥呼が死去しますので、卑弥呼が、173年に新羅へ使者を送ってから248年に亡くなるまでに75年が経過していることとなります。もし、新羅へ使者を送ったのが20歳とすれば、死亡年齢は95歳ということになります。古代の寿命は40~50歳とされますので、173年の卑弥呼と248年に亡くなった卑弥呼は別人ではなかろうかと思えます。卑弥呼の名は引き継がれた襲名とする仮説をたてれば、この長い期間についてうまく説明できます。

卑弥呼の年齢が「年已長大」というのは、結婚適齢期を過ぎていてもかかわらず未婚であるという意味で使われていると考えるべきでしょう。比較対照されたのは、古代の結婚適齢期である10代後半であり、これを過ぎていたので「年已長大」と記されたのであって、老婆ではないと思います。

結婚適齢期を過ぎてても未婚であるのは巫女であるからにほかなりません。

したがって、「年已長大」の卑弥呼の年齢は、20歳代、せいぜい30歳代初めを言うのではないかと思います。

ところで、壺輿は「卑弥呼」の名を襲名していないではないかとの疑問があると思えます。これに関して、私は次のように考えています。



歌舞伎や落語、各種の芸能には代々引き継がれる名跡襲名があります。その系統で最高の権威となって二度と使わない名跡を「止め名」といいます。たとえば、歌舞伎の三代目延若えんじやくが逝去した際には、遺言で延若を止め名とし、以後その襲名はありません。

こうした例を参考にすると、3世紀の「卑彌呼」は女王という最高の権威となったため、その3世紀の卑彌呼を最後に「止め名」になって、壺輿には「卑彌呼」が襲名されなかったのではないかと思います。

終わりに「年已長大」の卑彌呼の想像図を描いてみました。ご覧ください。

前回の例会の内容

■「舩牟羅国」の所在地（3）

瀬戸市 林 伸禧

『三国史記』諸本を比較検討したほか東アジアの地図を示し、舩牟羅國は済州島であるとの石田泉城氏の考えを追認した。

■白村江の戦いとその後

一宮市 畑田寿一

唐と新羅に対する賠償によって九州王朝の財政は破綻に帰した。白村江の戦後処理は近畿朝廷が行い九州王朝は当事者能力を失っていた。

■卑彌呼の冢 その7（完）

名古屋市 石田泉城

壺岐から共立された卑彌呼はその故地である壺岐に埋葬されたとし、弥生時代に壺岐の信仰・祭祀の対象となっていた鉢形山を卑彌呼の冢の有力な候補とした。

■古代逸年号（抄）

瀬戸市 林 伸禧

多元史観による古代史論考である「古代逸年号（抄）」と別冊「古代逸年号資料」を配布し古代逸年号に関する諸問題について言及した。

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡不要、遅刻・早退もかまいません。例会で発表する場合には資料を25部用意ください。

例会の予定

■ 例会の予定 例会後忘年会を近くで予定

- 1 日時 12月2日(日) 13:30~17:00
- 2 場所 名古屋市市政資料館 第1集会室
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
- 3 参加料 500円 (会員は不要)
- 4 交通機関
 - (1) 地下鉄名城線「市役所」、東徒歩8分
 - (2) 名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩5分
 - (3) 市バス「市政資料館南」、北徒歩5分
 - (4) 市バス「清水口」、南西徒歩8分
 - (5) 市バス「市役所」、東徒歩8分
- 5 駐車場 市政資料館：12台+α収容(無料)

■ 来月の例会 1月6日(日)13:30~

■ 投稿締切り日 12月24日(月)厳守

■ 投稿先（編集担当：石田）

furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

■ 投稿文の留意点（お願い）

- ・インデントやタブは設定しない。
- ・基本は、12ポイント。
- ・本文、引用文は、MS明朝12ポイント
- ・大小の見出しは、MSゴシック12ポイント
- ・本文中で使用の写真は別ファイルで。
- ・強調したい場合は、適宜、太字、鍵かっこ、下線などで示してください。
- ・編集側で文字等を修正する場合があるので校正の際に十分に確認してください。
